

社会科学古典資料センター創立の頃の思い出

On the earliest days of the Center for Historical Social Science Literature

細谷新治

HOSOYA Shinji

1. 附属図書館貴重書書庫の完成

社会科学古典資料センター（以下、古典センターと略称）が1978年に創立されてから早くも16年たつ。私が1981年停年退職してからでも10年以上たち、そろそろ記憶も薄れてきたが、古典センターに残されている書類や私のメモなどを頼りにその頃の思い出を書いてみよう。

古典センター創立の直接のきっかけは、何といてもバート・フランクリン文庫のわが大学への導入であった。この文庫の導入のドラマティックな経緯については、文庫の導入のために奮闘された当時の学長都留重人名誉教授が書かれている。^(註1)私も1973年2月の寒い最中にニューヨークのフランクリン氏の店の2階にあった文庫の調査をした思い出をこの年報の創刊号に書いたことがある。

1974年9月に図書館はフランクリン文庫を受け入れ、文庫の今後の整理・運用の方針を審議するため、小泉明図書館長の諮問機関として三井・フランクリン文庫協議会（略称、フランクリン文庫協議会）が設けられた。

その翌月の10月、MITの高名な国際経済学者キンドルバーガー教授が図書館を訪ねてこられた。彼の目的は、翌年の7月に「経済学知識の組織と検索」というテーマでキールで開かれる国際経済学会主催のシンポジウムに提出するペーパーを作成するためであった。そのとき彼を案内した小泉館長が、「この図書館のことを誰にきいたのですか」と尋ねると、彼は「ハーヴァード大学のクレス文庫のキュレーターK.E.カーベントンのアドバイスです」と答えた。彼は1970年に私がクレス文庫を訪ねたときからの友人で、メンガー・ギールケ文庫もよく知っていたのである。その年の暮にキンドル教授は、「経済学者による図書館の利用」というタイトルの論文のドラフトを館長に送ってきた。そこには彼が訪ねた世界の経済学を主題とする大図書館が紹介されており、わが図書館については、メンガー、ギールケ、シュンペーター、フランクリン文庫を紹介し、メンガー文庫とフランクリン文庫を、ロンドン大学のゴールドスミス文庫、ハーヴァード大学のクレス文庫、コロンビア大学のセリグマン文庫と並ぶ経済思想史の分野における世界の4大文庫である、と高く評価している。^(註2)

このドラフトを読まれた小泉館長は私に、「これだけ賞められると、一橋大学もいよいよ古典書を一ヶ所に集めた貴重書書庫を建てなければいけないな」といわれた。図書館の書庫の増築については当時2つの案があった。ひとつは学生用閲覧室と書庫の増築であり、ひとつは貴重書書庫の新築である。この2案について都留学長が文部省に打診したところ、創立百年記念事業としては貴重書書庫の新築の方がよいのではないか、という示唆があり、学長と館長の間に意見が一致した。その直後の1975年3月31日に都留学長は退任され、4月1日、小泉館長が館長兼任のまま学長事務取扱に就任された。一橋大学の昭和51年度の予算（概算要求）に組みこまれた貴重書書庫の建築が大蔵省を通過して翌1976年から工事がはじまり、竣工したのは1977年

3月である。この貴重書書庫の建築と並行してフランクリン文庫の整理も少しずつ進められた。

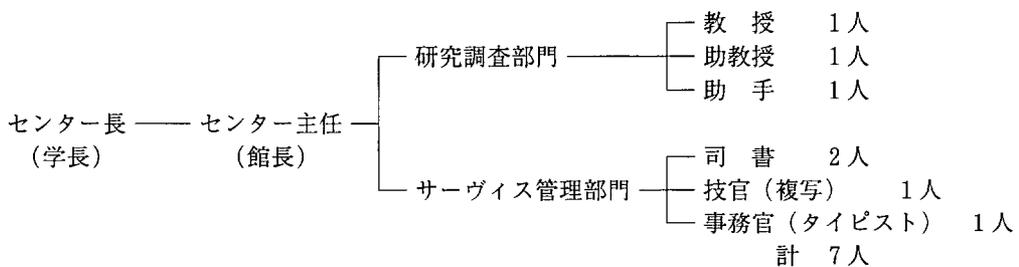
2. 古典資料センター設立の準備作業

8月1日、小泉学長代理は正式に学長に就任、次期館長に東京商大本科で私の同期生だった増淵龍夫教授が就任した。9月1日、前からフランクリン文庫の整理のため都留学長が招聘に努力されていたクレス文庫のカーペンター氏が奥さんと3人の娘さんを連れて羽田に着いた。カーペンター氏を図書館の職員として迎えるためには、たくさんのバーを越さねばならず、都留学長と小泉館長はたいへん苦勞され、よく私にこぼしておられたが、彼がきてからフランクリン文庫の整理は一気に進んだ。

社会科学古典資料センター設立について増淵館長からはじめて相談をされたのは、翌1976年の2月であった。この古典センター設立は、小泉学長が館長時代からの念願であった。私は経済研究所に全国共同利用施設として日本経済統計文献センターを設立したとき、統計資料の公開を巡って学内で反対があり、たいへん苦勞した話などをして協力を約束した。古典資料センター設立の昭和51年度概算要求の最終案ができたのは4月頃ではないかと思う。その大要はつぎのとおりである。

全体は3項目にわかれている。第一項は古典センターの設置の目的である。

第2項は「古典センター」の職員構成で、センターの位置づけと構成を次のように図示している。



ここでは、センター長は学長となっている。その理由は、現時点では古典センターを、経済研究所の施設として設立された日本経済統計文献センターのような全国共同利用施設として要求することはむずかしいと判断し、学内共同教育研究施設として要求した。その場合、これを図書館の施設として要求すると、教官職の定員をつけることに文部省は難色を示すだろうと予想して、古典センターの位置づけを附属図書館と並ぶ組織としたからである。

第3項は、「古典資料センター」に教官によって構成される研究調査部門を設置する理由で、学術情報サービスの提供、収集の3項目に分けて説明している。この点について私は別に「『社会科学古典資料センター』に教官系職員の配置を必要とする理由」と題する小冊子をつくって添付した。最後に経費は、特別設備費3,433万8千円を要求した。

この概算要求を本部に提出した頃の6月28日、貴重書のキュレイトラーの仕事振りを目のあたりに見せてくれたカーペンター氏と家族は羽田空港を発って帰国した。

1977年2月8日の深夜、小泉学長が突然亡くなられた。古典センターの設立に力をつくされた学長がセンターの開所を見ることなく亡くなられたことは何としても残念であった。5月9日、今度は私の書誌学の恩師大塚金之助教授が亡くなられた。先生は1922年ベルリン大学に留学中、メンガー教授の死亡を知り、直ちに当時の館長三浦新七教授と密接な連絡をとってメンガー未亡人と交渉、メンガー文庫を本学に導入した功勞者である。

秋に入って古典センターの昭和53年度予算が通ることが確実とわかり、10月頃から本格的な古典センター設立の準備作業が開始された。図書館は貴重書書庫への移転の準備にとりかかり、翌年の1月に図書館の全職員を動員した貴重書の大移動が実施された。

一方、私は増淵館長に協力してセンター創立の制度上の準備（センターに配置される予定の教官を選考する人事委員会、センター規則、センター長を補佐する運営委員会の規定、貴重書利用の暫定規則などの規則、規定、申し合わせ事項の原案の作成）にとりかかった。この作業と並行して、センターの事業計画を作成する準備段階であるセンターのなすべき仕事の洗い出し作業を図書館の岡崎君とともに進めた。当面の課題として、古典資料の管理体制・整理・利用の諸問題、雄松堂を通して発売されたゴールドスミス・クレス文庫のマイクロ・フィルムの購入、長期的課題として古典の本格的目録作成のための書誌・目録の収集、古典の体系的補充収集作業開始の準備段階としての本学古典の調査と総合目録の作成、センターの提供すべき学術情報サービスの内容、古典の保存・修理などなどの諸問題について検討した。

3. 古典センターの発足

3月30日、フランクリン文庫の仮目録が岡崎義富助手、松尾恵子助手、中野悠紀子事務官の努力によって完成した。4月1日、古典センターが制度上は発足した。ただし、準備が整わないため実際の開所は7月7日と予定された。6月1日、私は正式にセンター教授として発令され、統計文献センターから籍を離れた。所属は社会学部に決まった。この私の移籍については、図書館と統計文献センターとの間でいろいろやりとりがあったが、ここでは省略しよう。6月12日、フランクリン文庫協議会が開かれ、今後文庫に関する協議事項は午後には開かれる社会科学古典資料センター運営委員会に引き継がれることを確認して解散した。古典センター運営委員会は夕方から開かれた。議長は初代のセンター長に就任した増淵館長である。概算要求では、はじめセンター長は学長が兼任することになっていたが、のちに図書館長の兼任に改められたのである。委員はセンター長、センター教授、各学部研究所から1名、学長指名の図書委員2名、計9名が6月1日発令された。

7月7日、古典センターの開所式が行なわれた。都留先生、山田雄三先生などの名誉教授をはじめ学内外の多数の参列者を迎え、盛況のうちに開会式を終えた。私にとって忘れ難い思い出は、イギリス通貨論争関係コレクションで有名な本学名誉教授高垣寅次郎先生が、高齢にもかかわらず出席され、あとから私に長い励ましの手紙を書いて下さったことである。このとき来賓の方へお土産として絵葉書をあげた。これは、センターの貴重書・史料のなかから、「C.メンガーの『国民経済学原理』(1871)への著者の書込み」、「メンガーの書籍購入ノート」、「怒れるドゥ シェーヌ親父(パリ・コミュニケーション風刺画コレクションより)」などいくつかを選んでセットにしたものである。外国の大図書館はどこでもこのような所蔵貴重書の絵葉書を売っている。私も少しは持っているが、あとになってその図書館を思い出す好い記念品となるものである。この絵葉書は幸い好評で品切れになった。

9月10日、古典センターの設立のために私とともに苦勞した増淵館長が退任し、後任に木村増三教授が就任した。それから私が1981年3月に退職するまでのセンターの活動を、運営委員会の記録や概算要求の書類などによって要約しておこう。

1 貴重書の保存と利用との矛盾

センターでは当初センター所蔵の貴重書の館外貸出を認めなかった。これに対して学部

の先生方から講義のために学生に見せたい貴重書まで貸出を禁止するのは酷すぎる、などセンターの方針に反対する教官もいた。運営委員会では、この問題と、これに関連して貴重書の複写の問題が絶えず議論されている。

2 貴重書の収集

古典センターにおける貴重書は、センターの創立のときから私が退官するまでの間の3年の間に急ピッチで増加した。そのひとつは1978年度の文部省の外貨減らし特別予算により購入した18世紀のフランス経済・政治思想史を中心とした書物と史料869点である（この目録は翌年古典センターから刊行された）。また1980年に図書館が一橋大学百周年記念募金の一部で購入したベルンシュタイン・スヴァーリン文庫もセンターの所管となった。当時私は経済研究所の石川滋教授とともに研究所を代表してこの記念図書委員会の委員であった。レーニンの2人の旧友のコレクションを併せたこの世界でも稀なロシア革命文庫の購入に私が責任をもってあたることができたのは幸運であった。なおセンターにはその後もこの百年記念図書購入費によっていくつかのすぐれたコレクションが入っている（センターの「利用案内」の所蔵資料紹介欄やセンターの年報を参照）。また単行貴重図書の購入も少ない予算のなかから少しずつ進められ、これに関連して、センターの今後の文献・史料の収集の原則やそのためのセンター所蔵貴重書の欠落の基礎的調査の重要性についても審議され、一部実行された。

3 検索性カード目録の作成

センターは、書庫に入れない利用者のためにとりあえず検索性カード目録を作成することが急務である。そこでまず、メンガー、ギールケなどの現在ある冊子目録を解体してカード目録に再編することから作業を始めたが、これをゴールドスミス・クレス文庫のMF目録に拡大して作業を進めることになった。

4 センター所蔵図書の総合目録の完成

センターが所蔵する一般貴重図書については、岡崎助手と砂川淑子館員によって1976年冊子目録が刊行された。しかし、センター所蔵のすべての貴重図書の総合目録を作成することは容易なことではない。メンガー文庫やギールケ文庫の冊子目録を切り張りしてOKというわけにはいかないのである。昭和初期に刊行されたこの2つの文庫の冊子目録が古典の目録としては多くの欠陥をもっていることはよく知られている。それに現在進行中のフランクリン文庫のパンフレット類などを考えるとこの作業は大事業になる。

5 センター所蔵の貴重書・史料の復刻版の刊行

6 古典センターの年報の発行

年報の発行は、1979年の4月の委員会で検討され、翌81年3月31日に創刊号が発行された。創刊号の奥付にあり、2号からは表紙の右下に「題字 丸山鑿溪」とあるが、これは私が古典センターの年報には古典的書体（隷書）の題字が好いのではないかと発案して、本学卒の私の友人の書道家で、戦前長い期間にわたって本学で漢文や書道を教えられた杉山三郊先生の高弟丸山茂彦氏にお願いしたものである。センターが三郊先生の書風を伝えるこの題字を変えないことに感謝している。

7 西洋社会科学古典資料講習会

この講習会は、私が統計文献センターに在職中にお付き合いがあった京都大学人文科学研究所の東洋学文献センターと、東京大学東洋文化研究所の東洋学文献センターで実施さ

れていた漢籍の整理に携わる図書館職員の研修のために始められた一週間の講習会がたいへん好評であることを知って、これを西洋社会科学貴重書の目録を担当する図書館員の研修に応用したものである。当初一週間を考えたがいろいろな都合で3日間となり、費用も初めはフランクリンの基金をあてた。第一回の講習会は、私の退職直前の3月18日から3日間開かれ、幸い好評のためその年の11月に第2回を開催、その後も一回休んだだけで毎年開催されている。1985年の第5回からは費用も文部省に認められ、1985年からは4日間になり、修了証書が発行されている。その内容も講師として参加される本学内外先生方や図書館のベテランの熱心な協力によって年々充実し、これがひとつのきっかけとなってセンターからStudy Seriesが刊行されることになった。

4. おわりに

考えてみると、あの頃の私は、日本経済統計文献センターに所属していて、同センターの主任藤野正三郎教授の文献センター長期構想のうち明治初期の歴史統計データの統計調査システムの形成とその刊行物を追跡・蒐集してその内容を解説する作業を担当し、その成果を『明治前期日本経済統計解題書誌：富国強兵編』というシリーズとして刊行している最中であった。小泉学長や増淵館長に協力して古典センター設立のお手伝いはしたが、それは文部省に提出するセンター予算の原案の作成や、センター設立について各学部や評議会の賛成をえるための接衝、図書委員会その他の委員会の委員との話し合い、またセンター予算が通ってからは、各種の規則や規定の原案の作成、古典センター運営委員会の委員の先生方との話し合い、などの黒子的役割に忙殺され、かんじんのセンターの事業の内容の検討については、経済研究所の津田内匠教授を初めとする運営委員の先生方に、また日常の活動については、岡崎助手や松尾助手、中野事務官にまかせ切りだった。

そのようなわけで1981年4月に私の後任のセンター教授として静岡大学から経済思想史の大家杉山忠平教授を迎えることができて、これで私の役割りは終わったと心から安心した。その後センターは十数年を経て、1993年7月から、私たちが当時何度も議論しながら実現は不可能だとあきらめていたメンガー文庫のマイクロ化とメンガー目録の本格的改訂、さらにメンガー所蔵本の修理保存という大作業が、永井義雄センター教授の発案によって、丸善株式会社及び富士写真フィルム株式会社の協力を得て開始されたという嬉しいニュースをきくことができた。しかし、この喜びを語り合いたい小泉学長、増淵館長、木村館長、良知力、古賀英三郎のセンター運営委員は亡くなられた。16年の歳月はやはり長かったというべきであろうか。

- (1) 都留重人「“Burt Franklin Collection - Donated by Mitsui Group Companies” 入手の経緯」〔『一橋大学附属図書館史』一橋大学刊、1975.〕所収
- (2) このドラフトの完成原稿は1977年に出版されたシンポジウムの報告書の巻頭に収録された。

The use of libraries by economists: A personal view. “The organization and retrieval of economic knowledge. Proceedings of a Conference held by the International Economic Association at Kiel, West Germany.” edited by Mark Perlman. London, Macmillan Press, 1977.

(元社会科学古典資料センター教授)